

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

e-mail: shakaisuushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幢ヶ谷九〇四 電話(03)3337714649

FAX(03)32299153367

振替 〇〇一〇〇一九一五八四三二 労金 中央労金本店 No.11154163

購読料 月額700円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言

朝日の墮落が浮きぼりに

『論座』での朝日、読売論説責任者の対談

伊勢 太郎……………2

「ベア」から「賃金改善」……………3

— 〇六年春闘の焦点 —

何を学ばなければならないか

堀井 進……………5

— 9・11衆院選、9・15鉄建公団裁判判決から —

「9・15判決の階級闘争の意味」を掘り下げた

花井 吉宅……………8

アベノさきが見えない不安……………9

— 全国紙の社説から —

MBCテレビ韓国語の和訳!

真の歴史と真実を学ばせる

教師として生きていく自身に課せられた至上課題

増田 都子……………11

読者からのおたより……………13

編集部だより……………10

旬刊 社会通信

NO. 957

二〇〇六年二月一日号

二〇〇六年二月一日発行
毎月一日・二日・二日三回発行

朝日の墮落が浮きぼりに

『論座』での朝日、読売論説責任者の対談

保守・反動「読売」、革新・進歩「朝日」が、マスコミ界の構図であった。読売一千万部、朝日八百万部。こんな発行部数をもつ日刊紙は世界にない。宅配制度、それを支えるのが新聞少年―学生たち―である。彼らの労働条件は過酷、朝刊の準備は午前三時から、本紙以上に折り込み、意見広告が多い。新聞休刊日は第二月曜だけだから、新聞少年の苦勞はたいへん。

活字メディアは部数減が続いている。それはだれもが実感していることだ。まず列車内で新聞、週・月刊誌、文庫を手に行っている人がまれになった。若者が岩波の新書、文庫本を手に行っていると、なんだか心がなごむ。朝日、読売も、こんな状況下、部数を減らしつづけているに違いない。

新聞産業は編集、営業、印刷からなる。編集は「金喰い虫」、営業は部数管理にしやすいきとなり、編集と営業は対立する。部数減の中、営業は経費節減、「売れる」紙面づくりを編集に求める。朝日でいえば、営業は「護憲の読者は少数となった。改憲支持者にも配慮を」となる。それが朝日の十年くらい前からの宮澤喜一、後藤田を「護憲」派とする紙面づくりだ。宮澤は官僚を地でゆく人、後藤田は内務官僚として戦争の悲惨さを知る。彼らは「改憲」のあとを心配し、慎重に行動することを求める。「慎重」を朝日は「護憲」と取り違え、護憲と改憲の垣根を低くしてしまった。

朝日の月刊誌『論座』二月号は、朝日の論説主幹若宮氏と読売会長・主筆渡辺氏の対談を大きく掲載する。若宮氏は五八歳、渡辺氏は八十歳。前者は戦後世代、後者は戦中派・学徒動員世代の生き残りである。

朝日がナベツネになぜ対談をもちかけたのか。ナベツネが小泉の靖国参拝に反対し、戦争責任の明確化を主張したからだ。『論座』編集部的主張は、「共闘は可能か」との抽象的かつじつは他愛ないもの。なにを目的に、何のために「共闘」するのかさっぱりわからない。若宮君はナベツネが靖国参拝に異を唱えることに大感激。ナベツネ君は「戦争体験」をもとに、当時の軍部、政治家を批判してみせる。戦争責任の所在を示す必要がある、そのためには中国・韓国が納得する反省が必要、と。保守・反動の読売の総帥が①日本の戦争責任、②靖国参拝に異を唱える。その意図は何かと勘ぐりたくもなろうというものだ。

ナベツネの主張は、①日本の脅威は北朝鮮。この国が日本を攻撃してきた時どうする、②ソ連の中立条約破棄は戦争犯罪、③イラクのサダム・フセインは東条よりも悪い奴、④自衛隊は軍隊、ウソついちゃいけない。

「渡辺 共産党と社会党のイデオロギーはもう古い。若宮さんが論説主幹になったから、それは変わると期待してるんだ。」

若宮 期待されなくても、もうとつくに変わっていますよ(笑)。

若宮氏は軽い。渡辺氏は東アジアの国ぐにと仲良くし、北朝鮮への備えを構想する。
(伊勢太郎)

「ベア」から「賃金改善」

— 〇六年春闘の焦点 —

大儲けの資本にオズオズと

連合が久しぶりに「賃上げ」に舵を切った。その内容は①生産性向上に見合った「賃金改善」が必要、②一%以上の成果配分がなされるべき、③月例賃金の改善を最優先し、年間収入の維持・向上をめざす。電機連合は二千元、基幹労連は三千元（隔年春闘のため、一年千五百円）の「賃金改善」をはやばやと要求した。たたかい方は①経営者団体等の主張との対抗軸を明確に示す、②労働者全体の生活向上と不安の解消をめざし、労働基本権（団結、団体交渉、団体行動）を背景とする『春闘』にこだわるとする。しかし、連合方針の背景は変わっていない。というのは①統一要求基準は掲げられず、②ベアが「賃金改善」とのあいまいな言葉に変えられ、③成果・能力主義賃金を前提とした個別賃金要求が中心におかれ、④賃金獲得のための交渉は産別にさらに個別労資の支払い能力にまかせられている。

連合は「経営者団体等との対抗軸を明確に示す」という。連合と日本経団連の主張に根本的な違いはあるか、ない！ 生産性賃金論、企業の支払い能力論が両組織の基本とされるばかりか、連合会長は日本経団連と同様「労資関係というのは『安定帯』、日本をつくる一種のインフラ」と言って恥じることがないばかりか、ある集まりでは『不安の日本』についても、労使協同して何か努力することがないのかなあと考えながら、正月を迎えた」と述べる。

なぜ連合は「賃金改善」という名の賃上げに舵を切ったのか。連合は生産性向上、「参加・提言・改革」を基本路線とする。生産性向上の中心は①雇用、②労使協議、③公正分配と言い表される生産性三原則だ。連合傘下労組はこの十年、「企業の存続なくして労組は存在しない」と、企業「再建」のため①首切り、②税投入による過剰設備、天まで届かんばかりの不良債権解消、③ゼロ金利という国家と独占資本の政策に全面協力した。

企業は史上最高益を更新しつづける。他方、労働者、勤労国民の生活・労働条件は下がりつづけ、企業腐敗が国民生活を不安にさらす。電機産業では労働者が八十六万人から六十一万人へ、新日鉄は六万人から一万五千人まで減らされた。生産性三原則への不満が、それを推進する労組幹部にすら高まった。こうして、「少しばかり我われにオコボレちょうだい」と、「賃金改善」という名で賃上げ要求をせざるをえなくなったというわけだ。

支払い能力論

賃上げを「賃金改善」という。賃金改善とベアはどう違うのか。賃金改善とは何を意味するのか。「基本賃金」の原資増大。全労働者に支払う基本賃金の合計は引き上げる。だが、拡大した原資の配分方法をどうするかは各社に委ねる。ベアとはなにか。賃金表を書き換え、すべての労働者・賃金が一律に上げる。資本のいういわゆる「横並び」がこれである。今度の「賃金改善」はだれに配分するかが企業の判断で決められることになる。能力主義が貫かれる賃上げなのだ。

なんでこんなわかりづらい要求となったのか。成果主義導入、定昇廃止で賃金制度がすっかり変えられてしまったこと、もう一つは日本経団連がベアに強い抵抗感があることだ。つまり、支払い能力にもとづく賃金論の徹底である。

日本経団連の主張に変化はない。それは〇六年版「経労委報告」のタイトルを「経営者よ 正しく 強かれ」と、旧日経連が発足した時のスローガンをわざわざ持ち出したことにも明らかだ。資本は変わらない、変わったのは労組である。

なぜ大昔のスローガンが再び持ち出されたのか。旧日経連がつくられた一九四八年は敗戦による混乱期だった。資本は労働組合に絶対妥協するな、階級的労働組合をたたきつぶせ、経営権を確立せよと号令したのだ。日本の独占企業は三池、安保の闘いを契機に生産力を伸ばし、世界に基地をつくった。そして今、大競争が独占企業の前にある。その競争に勝ち抜けがその理由である。

強まる経団連攻勢

日本経団連の主張は①景気は回復基調、しかし、競争は激化、②競争に打ち勝つためには労使の一層の協力が必要、③ふつうの労働者にも報いる必要、④個別企業の生産性向上「見合い分」、支払い能力の範囲内で自主的に決定せよ、⑤ただし、ベア、横並びはだめというものだ。たとえば、次のようにである。

「賃金決定においては、生産性の裏付けのない、横並びで賃金水準を底上げするベアースアップはわが国の高コスト構造の原因となるだけでなく、企業の競争力を損ねる。個別企業の賃金決定は個別労使がそれぞれの経営事情を踏まえて行うべきである。いかなる決定を行うかはあくまでも個別労使の自由だが、結果的には、激しい国際競争と行き先不透明な経営環境が続くなか、国際的にトップレベルにある賃金をこれ以上引き上げることはできないとの判断に至る企業が大多数を占めるものと思われる」

日本経団連は資本の海外進出と厩大にふくれあがった権益を守るために軍隊の明確化にむけ「労使は政治の安定帯」と、労資協調の体制をさらに、強めたいのだ。その上に立って、自由に労働者をこき使える仕組みと政治をつくりたいとする。

それは春闘を「定期的に情報を共有し、意見交換をはかる場。広く経済・経営などについても認識の共有化をはかることが大切」といい、さらなる搾取強化への方策として労働分野における規制改革として①労働時間の自由化、②労働契約法導入、③産業別最賃制度の廃止を掲げていることにも明らかである。

何を学ばなければならぬか

— 9・11衆院選、9・15鉄建公団裁判判決から —

労働者を搾取・収奪しつつくそうとする小泉自民党政府

九・一五総選挙は「資本と労働」の階級社会の本質を、余すところなく見せつけた。今や三〇%台の支持率しかない自民党でも、マスコミ権力や広告会社（電通）をフルに使い、詐欺師・小泉と小選挙区制度のマジックを駆使することによって、圧倒的多数の議席を獲得し、さらなる支配の続行、労働者からの搾取と大衆収奪の強化が実現可能であることを我々に見せつけたのである。まさに、なりふり構わぬ、権力の総動員の選挙であった（比例区における得票率は三八・二%にすぎないのに、全議席は二九六議席、六一・六%に昇る）。

政治権力をいかなる政党に任せるとかという意味での総選挙は、これまで通りの搾取を続けることができるかどうかという、巨大企業（独占資本）にとっては、非常に重要な政治課題である。だからこそ彼らは、あらゆる策を弄し、たとえ自民党がダメでも民主党に、民主党がダメなら〇〇党にと、体制内の政党に対して、自らの支配の安定を常に求めている。

その意味で総選挙は、資本と労働という二つの階級の力関係がどのような状態であるかを明確に教えてくれるのであり、さらに掘り下げて真剣に総括しなければならぬ重要な課題である。勤労国民の状態をはじめ、小泉のデマゴグや民主党の実態から、あるいは我々の護憲派の動向から、我々はしっかりと学び、次のたたかいに生かすことが重要である。

今回の総選挙から何を学ぶか。第一に、地方を含めて一〇〇兆円にもぼる財政赤字を抱える自民党政府は、新自由主義の政策によって、労働者からの搾取と、大衆収奪をより強化するしかない状態にあること、を明確に示したということである。

つまり、かつてのケインズ政策のように、公共事業や雇用対策の充実として、または「福祉」政策としての国民への「譲歩」（カネのばらまき）など一切考えられなくなってしまうこと。失業で苦しもうが、凶悪犯罪が増えようが、自殺しようが、ホームレスになろうが、政府はまったく感知しませんよ、自己責任ですよ、と（政府自体が）言うしかないのである。大競争時代のなかで、企業全体に余裕がないのである。しかも他方では、様々な税金の徴収をはじめ、社会保険料の値上げなど大衆収奪は抜目なく行なわれている。やらずぶつたりとはこのことである。

愛媛の仲間がこの総選挙を評して「殺されかかっている人が、殺人犯に助けてくれとすがっているようなもの」と言ったが、まさにその通りであろう。なぜこんな選挙になってしまったのか。まず、正面から対決するはずの民主党にその問題がある。

資本に真っ向から対決しない民主党に、労働者の利益はまもれない

今回の総選挙における民主党の対応について考える。政治とは国民をだますもの、とはよく言ったものである。「あれだけ国民はひどい目にあつたのに、まただまされるんだよね」とは、故・住井すゑさんの口癖である。日本の民主主義の底の浅さの問題がここにある。

小泉のだましのテクニクもすごいけれど、実は民主党も労働者階級をだますために生まれてきたようなもの。「連合」もしかりである。労働者からの搾取のしくみ、大衆からの収奪のしくみを温存したまま、労使協調の労働組合幹部が加わった上で、自民党とは少し違った角度による、巨大企業に莫大な利益を保障するものに他ならない。「民間で出来ることは民間に」「公務員をリストラし：」「痛みは伴うが景気回復を：」と叫ぶ小泉に対して、「我々もそう思うが、やり方が少し違う」などと言っていたのでは、勝てる選挙も勝てないし、国民の八〇％を越える賃金労働者を「だまし」で、味方につけることさえ不可能といえよう。

今回の選挙ほど、民主党は自民党と変わらない、という認識で終始した選挙はない。いかにも働く者の味方のような顔をしている議員もいるが、いざと云うときにはサーと手を引いてしまう。むしろ、最も不公平で悪質な税金、消費税の大幅な引き上げを言い、平和憲法を変えて、若者を戦場に送り、死に追いやることさえ平気な民主党の本質。このようなバケの皮がはがれた選挙であり、自民党と変わらない政党ゆえに、真っ向からの対決姿勢が取れず、存在意義を失ってしまったのではないか。

資本と労働の対決という今日の基本的な階級関係の中において、民主党はあくまでも資本の側に位置するものであり、政権が取れるとすれば、国民の八〇％を占める賃金労働者をいかに「だます」か、そのだましのテクニクにまつほかはない。

あまりにも自民政権が長すぎたから、とにかく一度は民主党に、という向きもあるが、しかしそれは、次の選挙まで何もしない人の言うセリフ。今日、未来の社会を創るのは先進的な労働者である。積極的な労働者こそ、今日の不正や矛盾とたたかい、仲間の信頼を得て団結し、新しい社会を創り発展させることができる。これが社会の発展の法則である。国民をだますことによって新しい社会は生まれない。豊かな生活は勝ち取れない。民主党に働く者の権利の向上を託すことはできない。

今日の矛盾（失業、凶悪犯罪の多発、貧富の格差の拡大、飢え、将来への不安）は、経済的に資本による労働者支配に限界がきていることを示すものである。

この資本主義の断末魔の苦しみを取り除いてやること。活動的な労働者が力を合わせ、新しい社会を築くこと、そのことによって人民のより豊かな生活を保障すること。これらのことを広く労働者に呼びかけ、理解を求めるものでなければならぬ。

一人でもたち上がることの大切さ

総選挙から四日後、九月一五日の判決を心待ちにしていた人は多かつたと思う。負

けるはずのない裁判だった。だって最高裁が「責任は（JRにはないとしても）あるとすれば鉄建公団にある」と言った訳でしょう。しかも国の機関である労働委員会でさえ、「不当解雇」といつている訳だから、これまでの一八年間の未払い賃金、退職金、年金の差額などのすべてを支払ってもらわなければならぬ。まさに全労働者の権利のためにも、勝たねばならない裁判であったと思う。

ところがどっこい、不当労働行為については認められたもの（一人五〇〇万円、利息を含めて八八六万円、総額二五億円余りの慰謝料を強制執行で受け取る）、職員としての地位については認められず、未払い賃金などの請求は棄却されたのである。

一八年にも及ぶ原告や家族の苦しみを慰める金額として、五〇〇万円は余りにも低すぎる。また、JRに採用されなかったことが不当労働行為として認められるのであれば、本来ならば元の職場に戻し、未払い賃金などを支払うのが法律上の原則である。にもかかわらず、三年後の一九九〇年に、再就職促進法によって首を切られたことについては容認するという不当な判決である。おい待てよ。三年間のうちに元の職場に戻るのが筋だろう。戻せなかったのだから、やはり不当労働行為の責任はついて回るだろう。難波裁判官の目はどこについているのか。まさに、国会で法律として決めたことには「何でも従う」とする悪質な判決にほかならない。

裁判所は人事を通じて右傾化が完了している。この行政訴訟の場合、最高裁の三人の判事が当時の国鉄や清算事業団に出向し、その職員に法律上の知恵をつけ、あるいは自ら法案を作成し、国会に提出する。それが「国鉄改革法」あるいは「再就職促進法」として成立する。そして数年が経ち、自分が裁判所に戻ったところ、その法律にもとづいて裁判し、あるいは同僚の裁判官に裁判させるといふやり方である。まさに自作自演である。つまり、司法の独立、三権分立などつゆもなく、不正を許さず立ち上がる国民に襲いかかる。「国は過ちを犯さぬもの」、などと寝言を言いつつ…。

つまり、一〇四七名の不当に解雇された者や家族がどうなるかと、憲法二八条の団結権が反故にされようが、資本主義体制を維持するためには、裁判所も含めて、国家権力はまったく関知しないのである。こんなことが許されていいのだろうか。

労働組合の右傾化はさらにひどい。国労本部もその例外ではない。多数派組合として幹部のうまみを味わいたい。そのために「連合」に合流しようとするれば、一〇四七名の解雇撤回闘争など中止するほかはない。統制処分や兵糧攻めをしてまで、闘う闘争団に圧力をかけてきた。しかし、その圧力に屈せず、全国の支後者とともに、坦々と鉄建公団訴訟を続けてきたのである。そして、このたたかいがなかったら、今回の不当労働行為の認定と慰謝料の支払い命令は生まれて来なかったのである。

「闘った人がいたから今がある」「高裁での全面勝利をめざして我々は闘う」（ともにGOニュース）と宣言する原告団と家族から、我々は多くのことを学んだ。今回の総選挙において、若者が大挙押しかけて小泉・自民党に投票したのも、マスコミが「小泉劇場」と称して、おもしろおかしく自民党への投票を誘導したのも、「連合」

を中心とした右翼労働組合の指導性の無さ、労働者教育の欠如に原因がある。

まさに、一人ひとりの立ち上がり、自らが何をなすべきかをしっかりと考え、仲間とともに立ち上がることの重要性が、今日ほど問われている時はない。

(堀井進 つづく)

「9・15判決の階級闘争の意味」を掘り下げた

昨年末、秋も深まった筑波山中にて、一泊の学習交流会が催された。この会の目的は、私たち労働者・市民が一人の人間として闘いの展望を切り拓くために何を考え、どのように行動していき、そのことを通して、私たちの生き方の「意味」を深く問うことであった。

学習内容が抽象化しないように、今もつともトレンディーな「鉄建公団訴訟9・15判決」をテーマとして取り上げた。講師として、国鉄闘争問題に最適なTさんを招き、レクチャーして頂いた。

この交流会がはずみ台の一つとなつて、十二月の『9・15判決を考える会』や『N関労・茨城』発足を地域に知らせ広げていく運動に取り組もうということになった。

「9・15判決」の評価については、すでに、加藤晋介主任弁護人があますところなく下している(『ともにGOーニュース、9月号』)し、Tさんのレクチャーや会での討論を逐条的になぞることは避けて、ここでは、それらを含みつつ、より内在的・本質的に考えてみたいと思う。それが標題の「∴意味を掘り下げた」の含意である。

一つは、階級的社会および現代の支配階級存在である。国鉄をして膨大な赤字を謀略的につくり出し、すでにそのことで土建資本・ゼネコンに大もうけさせながら、赤字のツケを労働者や国民に回し、自らの責任にはほうかむりした。これこそが分割民営化の正体だった。ついでに当時最強の国労も潰し、大幅なりストラを「国家的不当労働行為」と共にやってのけた。国民やメディアまで支配層側についてしまった。味をしめた支配層は、その後、NTT、郵政へと魔手を伸ばし、今また公務員バッシングの只中にある。

この支配階級の正体とは何か。多国籍企業の資本家階級であり、それと一体化した軍産複合体(これは米国のみならず、今や世界的に展開しつつある)で、これこそが現代帝国主義の中核部隊である。

この支配階級の策動は、公社など国家的公共体の私物化のみならず、金融支配、さらにメディア、教育、文化、政党にまで広範囲に及んでいる。

二つは、階級支配の日本的な洗脳法である。改憲、教基法改悪、日の丸・君が代の強制、靖国遊就館の史観、平和教育への敵視などの策動がそうであり、これらはいず

れも天皇制の亡霊を駆使（春・秋の園遊会、叙勲、女帝問題、元号や祝日もそうだ）しつつ、ネオ国家主義、草の根ファシズムなど『共同体主義』の方向で国家支配の方法を錯倒させようとしている。国民大衆を眠り込ませようと、あらゆる手段を動員しているわけだが、この催眠法の中には、労働組合や労働法制の改悪（労働契約法）や共謀・罪も含まれている。いわば用意周到なのだ。

三つは、こうして「偽りの国家」を捏造することで、国民（とりわけ弱者大衆）をして、希望のないアノミーの海での漂流生活に追い込んでいく。（格差社会の拡大、リストラの常態化、中高年フリーターの増加、犯罪の急増など）。

階級敵（軍産複合体、『米帝』とそれに隷従する日本の為政者・支配層）は明らかであるが、この資本主義的支配は強大過ぎて、人民の民主主義（つまり階級闘争は茫然自失の）ままでありつづけるのか？ それとも有効な突破口はあるのか？ 特効薬はないのだが、結局は、今、津々浦々で点的に闘われているしんどい闘いに連帯して、その「点を線」にし、大衆化し、支配階級の企図に対抗していくしかない。国労闘争も、その貴重な点の一つとしてある。（花井 吉宅）

わきが 見えない不安

― 全国紙の社説から ―

元旦の楽しみは全国紙の社説である。現代は「保守の『改革』」、正確には反動、革命の中にある。年末、少子高齢化に加うるに人口減少、膨大な財政赤字が喧伝された。市場万能主義の風潮は格差拡大、「勝ち組・負け組」を一方の極に大金持ちを他方の極には窮乏と貧困を生んでいる。「小泉劇場」にみられた手法、さらには靖国とアジア外交等々。○六年を各紙はどう論じたのか。

東京は「日本の出番なのに……」と題し、「小泉首相の言動は、国内の中堅、若手政治家の偏狭なナショナリズムを刺激しています」とし、「歴史への反省を忘れては、アジアの国々の信頼を得ることはできません」と断じる。

毎日「壮大な破壊後の展望が大事―結果責任負ってこそ名首相」と題し、「いまだ道半ばでしかない小泉改革を他人の手に任せず、自分自身で成し遂げるのが政治家として首相として筋」「無責任」と批判し続投を求める。

産経は「新たに始まる未知の世界―アジア戦略の根幹は日米同盟」と題し、「日本は一つの分小嶺を越えた」と、人口減少時代の到来、皇室典範改正は「日本を日本としてきた伝統と文化の改変」と。一方で、小泉に『靖国参拝はもはや外交問題にならない』との認識が定着するまで姿勢を貫け」と発破をかける。

日経は「成長力を高め魅力のある日本を創ろう。」人口減少を明治以来の日本の分岐点」ととらえ、「縮み経済の悪循環をもたらし、やがて日本を衰亡させる」「その危機感こそ共有すべき」と説く、方策は「安心して子どもを生み育てる」環境づくりを訴

える。

読売は「人口減少時代の国家的対応を―市場原理主義への歯止めも必要だ」。人口減少を「民族としての歴史的節目」として、①労働力人口の減少、②国債の国内消化への不安、③社会保障制度をあげる。そして「消費税一五〇二五％は普通のことと、国民を丁寧の説得し先導するのが政治の役割」、「いつまでも国際的責任から逃げていてはならない。憲法改正を待たず、政府解釈の変更によって対応すべき」と消費税増税、集団的自衛権「行使」を政府にせまる。

「これなに」と首をかしげたくなつたのが朝日の「武士道をどう生かす」。朝日は武士道を「いつでも失われぬ他者への哀れみの心」、「弱者へ敗者への『仁』」であり、『武士の情け』『測隠の情』と勝手に解釈する。「武士道」について、日本を暗いファシズムと戦争に導いた『国体の本義』は「我が国民道徳の上に顕著なる特色を示すものとして、武士道を挙げる事が出来る。

武士の社会には、古の氏族に於ける我が国特有の全体的な組織及び精神がよく継承せられていた。主従の間は恩義を以て結ばれながら、それが恩義を超えた没我の精神となり、死を観ること帰するが如きに至つた。：即ち死によつて真の生命を全うせんとした。個に執し個を立てて全を失ふよりも、全を全うし全を生かすために個を殺さんとするのである。

：生死一如の中に、よく忠の道を全うするのが我が武士道である」（『国体の本義』昭和一二年五月発行、文部省、一一〇～一一二頁。）と述べる。「神風特攻隊」の精神こそ武士道というのである。靖国と同様、武士道にも歴史はある。

社説に共通している危機感市場万能主義と格差拡大への不安。読売ですら「市場原理主義への歯止めも必要」というくらいである。朝日の社説も主旨は同じだ。しかし、歯切れは悪い！

◇ 編集部 だ より ◇

◇我が家・事務所は狭い。学生時代からお金もないのに本を買い続けた。納める所はない。実家、妻の家、レンタルの物置、さらには身内に、蔵書は分散。

◇実家に送った資料、書籍の類は、母の死を契機に処分された。我が身内には「捨てる」技術をもつ人間がいます。

◇ある友人から「本の好きなおじぎがありました。その本処分するのにたいへんだつた」と聞きました。ならば、必要な本を除き、お読みいただけるならと、昨年は友人・知人に「迷惑でなければもらつてよ」と、勝手に送らせてもらいました。

◇送らせてもらったもの、処分したものを含め三、四千冊になるでしょうか。狭い我が家、まだ本のさばりかえています。これらの書籍をどうするか。

◇悩みは他にもあるんです。書く時、どうしても必要になる時があるんですよね。

◇「読者からのおたより」は、賀状から要点をかってに取捨選択しつくらせてもらいました。そして名前も入れました。失礼があればお許し下さい。

真の歴史と真実を学ばせる

教師として生きていく自身に課せられた至上課題

昨日の裁判傍聴に来てくださいました森正孝さんが、お知り合いの在日の方にMBCテレビの韓国語の和訳を頼んでくださって、持ってきてくれました！ ○五年一月一八日深夜放映（実際は、一九日、午前〇時〇〇〜）「ワールド・ワイド・ニュース、日本より『ノ・ムヒョン大統領への手紙』事件」。カッコ内は、増田の補充です。

（キヤスター） エイペック通常会談も終わりました。日本の小泉総理は会談のために訪韓中です。しかし、韓日の政治高官の今回の出会いも、韓日間で正常化されていない歴史的問題の解決に結びつくかは、依然として疑問です。小泉総理の右傾化の傾向が日毎ひどくなっている様子が懸念されているためです。

去る一〇月末、東京都教育委員会に懲戒処分を受け六ヶ月間教壇に立てない一人の女性教師が（有楽町の外国特派員協会で）記者会見を開きました。（MBC日本特派員の）オ・サン・クアンが彼女に会ってきました。彼女が受けた懲戒処分の理由は驚くべきものでした。それは、ノ・ムヒョン現大統領に送った一つの手紙からでした。

（音楽）（増田の出勤風景・ナレーション） 東京目黒の研修センターまで千葉の自宅からバスと電車を乗り換え二時間近く立ちっぱなしで出勤する増田先生の身体は、すでにクタクタになっています。そして、そこまで向かう足取りが重くなるのには理由があります。

（増田の言葉が入る・ナレーション） 午前九時から午後五時四五分まで、本を読みレポートを書く単純で統制を受ける生活、自由に動けるのは一二時の昼食時間だけです。それも一二時一五分にならないと外出できないので、屋上に上がって軽く体操をし、その時間に出かけます。昼食時間四五分の短い自由？ 昼の四五分間、彼女は一人で小さな公園を見つけ簡単に昼食をすませます。

（増田の公園での昼食風景・インタビュー）
（ナレーション） 中学校で社会科の歴史を教える増田先生は、生徒達が歴史と社会現象について自分なりの考えを持てるよう紙上討論という授業方法を用いています。一つのテーマを決め、生徒が意見を書き、それを集め、お互いの意見を比較します。原爆問題、日本の戦争責任というかなり重い問題を扱うのですが、三月にはノ大統領の三・一記念演説を紙上討論のテーマにしました。

（大統領演説を扱った理由を増田が語る場面）

(ナレーション) (増田先生は) 生徒達が (大統領) 三・一節記念演説を読み、「ノ大統領へ送る手紙」というテーマで、作文を書くようにしました。もちろん彼女も大統領宛手紙を書いたばかりでなく、(生徒達の手紙とともに) その手紙も東京韓国領事館に送ったのです。ところが彼女の手紙の内容に「(東京都議会) 石原都知事(の仲間の都議会議員・古賀俊昭) が『日本は他国を侵略したことがない』と言った」ということで、実名を挙げた部分がありました。

増田先生が通っていた九段中学校は靖国神社から一〇〇M離れた場所にあります。(靖国神社奉賛会会員である) 保護者の一人が子どもの持ち帰った(紙上討論のその) プリントを見て、教育委員会に報告し、それが懲戒処分の対象になったのです。

(千代田区教委の、たぶん、酒井指導室長の電話インタビューが入る)

「増田先生が、自分の意見は私見を子どもに語ったことが問題だ。(『侵略したことがない』と都議が、都議会で発言するなんて) けしからん、と。(生徒に教えたなんて、けしからん)！」これは、処分&現場外しの処罰に値する悪事？だ、と、酒井区教委は言うのです・・・増田(増田の語り)

(ナレーション) 増田先生に対して同僚教師の八〇%以上が支持を寄せ、研修処分の取り消し審査を裁判所に申し立てましたが、裁判所は却下しました。

(増田の語り) 『(裁判所の研修取り消し判決を得て) 正義が勝ちました』と生徒に教えたかったですけど・・・」

(ナレーション) しかし、彼女は「教育委員会は自分の大統領宛手紙を処分の理由にしているけれど、それより深刻に受止めなければならないのは、生徒達の意見の文章である」と言います。(真の処分理由は、教育委員会や右翼が) 隠したがっている日本の過去を生徒達が直視していることだったからです。(増田の語り) 「極右の石原知事と東京都教育委員会と右翼の都議会議員が・・・」

(ナレーション) 東京都教育委員会は、二〇〇三年一〇月、学校行事のうちに国旗掲揚と「君が代」斉唱の義務化を強制しました。その後、歌わなかったり立たなかったりした、という理由等で教師達を懲戒処分しました。二年間に数百人が処分を受け、それに対して彼らはその処分取り消し等の裁判を何回も行っている、という状況です。(「日の君、解雇訴訟」の金子さんへのインタビューが入る)

(ナレーション) ところで、東京都の(教師に対する) 処分が多い理由は、六名の教育委員会の委員の全てを石原都知事が(自分と同じ考えの人物を) 指名するためです。

(「市民の党」の都議会議員、伊沢けい子さんへのインタビューが入る)

(ナレーション) 紙上討論授業の内容問題に関して、すでに九九年からの二年半という間、研修処分を受けた彼女は、授業を通して生徒達の考える力が育っていく姿を見る時が一番嬉しいと言います。そして一九九七年の卒業式で一人の生徒が読んだ卒業の言葉(これは生徒達の卒業式実行委員会が「三年間で一番、印象に残っていること」というアンケートを取って「紙上討論で、とても成長できた」と書いてくれたもの!増田)が彼女にとつて最高の宝物だとも言っています。

一日も早く学校に戻りたい彼女は、最近、いろいろな集会を回るのに忙しいです。日本の言論界・マス・メディアと裁判所が、何の助けにもならなかったから、自ら立ち上がり、集会で自分の悔しさとやり切れなさを訴えているのです。

(増田の全労協の集会での発言風景が入る)

(ナレーション) 現在、闘いが繰り広げられている中で、彼女が一番慰められたのは、生徒達からの激励のメール・手紙でした。彼女が早く教壇に戻りたい理由も、また、その生徒達のためです。(生徒のメールを読み上げる増田の言葉が入る「私は、『増田先生の代わりの先生』ではなく、増田先生に教わりたいのです」：増田、涙：)

(キヤスター) 生徒達の正しい歴史認識を育てるための一人の教師の努力が「教権剥奪」という結果に及んだこの事件を見て、日増しに右傾化に向かっていく日本社会の一断面を見ているような感をぬぐえません。増田先生は、すでに二回も同様の懲戒処分をうけているのです。

「なぜ、そうまでして苦しい闘いをするのか?」という問いに、彼女は「生徒達に真の歴史と真実を学ばせることが教師として生きていく自身に課せられた至上課題だ」と言います。

◇ 読者からのおたより ◇

再建決意 昨年一一・九抗議集会には二百名を超える仲間が結集し、C O患者の最後の一人まで守り抜き大牟田労災病院を高次脳機能障害のセンターとして再建することを全員で決議。これまでの厚労省との十三回に及ぶ集団交渉のなかで一月末には大筋の方向が決まるのではと思っております。(福岡・石原マサ子)

編集部より 福祉切り捨てへの闘い、そして労働者の安全、これは一体です。解決の年に 昨年は判決も出、今年こそは解決の年に。体制も整いつつあります。頑張ります。(国労音威子府・小西邦広)

編集部より お手伝いできることあれば遠慮なくお申し付けを。

政令都市? 新潟市は約八十一万人の大農業都市として、平成十九年の政令都市をめざして動き出しました。これは県並みの権限が付加される一方で負担もともないです。合併建設計画や新潟駅連続立体交差事業など課題も山積みです。(新潟・小林義昭)

編集部より 大きいことはけつしいことじゃないのに。

闘い必要 道職員の人員削減、賃金切り下げなど、公務員賃金が削減されています。次は私たちに

必ず起こってきます。権利剥奪、雇用不安、賃金切り下げなどを黙って見過ごすことの限界が近づいている。
(帯広・みんな)

編集部より 闘いが必要になります。ストライキというたまたかいです。
さらに露骨 十一月二十日のNHKテレビに中曽根元首相が登壇。「五五年体制崩壊は意識的にやったのか」の間に、「意識的にやった」と。不法行為発言を垂れ流し、チェックをしないNHKに抗議の電話。担当者は「もしそういう発言だとしたら、ちよつとまずい」と答えていました。
(東京・松原明)

編集部より 「反動」時代の証。中曽根は「反動を改革」にしたのもオレと自慢。生き残りには中曽根だけ。東の松田も今回の事故で退任。裁判にはプラスかな？

ツケ 経済財政諮問会議、財政制度審議会はじめ、さきの衆院選挙の結果がモロに反映され、国有林事業の経営形態のあり方がまたぞろ問題に。何でもありの状況に腹が立つ毎日。と言っても、労働組合がきちんと選挙闘争、日常闘争をやっていないツケが一気に吹き出しているのでしょうか、新聞づくりの参考にしたくなりました。一部、下記におねがいします。
(高知・N)

編集部より ご購読に感謝。今、「小泉劇場」の本質について思案中です。新聞づくりのお役に立てるかも。乞うご期待です。

なぜだろう 最近、反権力的な集会や資料の配布が多くなった。なぜだろう。その原因は、小泉をブッシュの『ポチ』にするなどアメリカの日本に対する植民地支配的な政策なのに、そのことがかすられて見えず、報道もされないため、直感的な原因だけに、視点が奪われがちな感じ。
(神奈川・木村哲蔵)

編集部より 時代の流れが速く、ついていくだけで精一杯。その現れなのでは。
過ちをくり返さない 今の日本の政治・経済は六・七十年前の軍国主義のもと、海外に資源領土を

求め侵略し、殺戮と破壊を極め、国民と兵士を死の底に追い込んだ、その時の初期に酷似しており、今終局を迎えるわけにはいかないな、などと考え込む昨今です。「人らしい生活の土台は、平和があつてこそです。共に平和憲法・第九条の改悪に反対して闘いましょう。」
(山形・千葉常義)

編集部より 日本の特徴は群れて流れて、ダラダラと反動化してしまうこと。でも 憲法改悪は「反革命」です。

近況 劇場化、というより漫画化してしまった政界狂騒の陰で、「過去の歴史的経緯を真摯に省みる」努力は、国民全体の意志としては、ついに発揮されずに終わったように思われます。欧州各国での取り組みと比較しても、その格差には愕然とします。近況ですが、アナトリー・A・コーシキン著『大国の攻防―世界大戦における日ソ戦』を昨年末に翻訳・出版。
(神奈川・佐藤利郎)

編集部より 大きな本なんでしょうね。お読みになりたい方は編集部まで。
さばききれない 郵政の職場では人減らしの影響で年賀状、小包がさばけ切れない忙しさになっています。こんな状況に追い込まれても、連合全通(JPU)・全郵政は労働者を当局に完全に売り渡してしまいました。
(埼玉・O)

編集部より 同じような賀状、いくつかいただきます。身体直して、しっかりし。

芽磨く 青天井の防衛費についてマスコミも誰もモノ言わぬ戦前回帰、まさに怪奇現象です。今年「週刊金曜日」、「社会通信」、そして魔の淵から這いあがった「辻元清美さん」を応援しようと考えています。確かに「虫けら」のお伴は適いませせん。牙は磨いておこうつと！
(千葉・柳田祥子)

編集部より 石にかじりついても一千号までがんばりたい。応援よろしく。

「いろはカルタ」 障害児をもつ元中学校の教師の年賀状からの「いろはカルタ」。「ろ」論より絶滅 核兵器、「の」のど元すぎれば 侵略も正当化、「む」無理難題の米軍基地、「ん」人生も野球も九回裏 ツウアウトから。「ん」に感動してやる気をおこしています。
(長崎・永田悦子)

編集部より 私めも還暦。まさに光陰矢の如しの毎日です。気力奮いたたせねば。

一千号めざせ 「社会通信」一千号も間近か。がんばって下さい。
(東京・酒井武史)

編集部より 一千号、なんとか実現したい。

ひとすじの光明 お世話になり通しの我が屋にもひとすじの光明が。一九年の長い日々を経て、ようやく国鉄が行った不法行為が裁判で断罪されたのです。
(稚内・田中博 廣子)

編集部より 本場のヤマ場の到来です。さらにご奮闘を。